

野口豹藏旧蔵『蘭学資料』小察

杉本つとむ

早稲田大学図書館に最近収納された野口豹藏旧蔵の蘭学資料（写本）は、従来のようにどちらかというと著名な蘭学者のそれと異なつて、無名というか、ごく一般的な蘭学学習の一学徒にかかわる資料として注目できる。それだけにまた、蘭学のひろがりといったもの、あるいはどのようなテキストや学習法を受けたかなどが判明する点で興味ふかい。直接にこの資料のオークションに關係したものとして、ここ数年、内容について、あれこれと考え、資料の位置づけを心がけてきた。以下、小察したところを記して、この資料が極めて貴重なものであることを報告したい。

野口豹藏旧蔵資料（以下、資料と略示する）はつぎの三種に分類して図書館に収蔵されている。現装——袋綴・四計眼・和中——はいずれも、図書館にはいつてから修補され整備されたものである。三本にはつぎの書名を与えている。

a 和蘭訳文家法 b 阿蘭陀和奇 c 和解例言

書名と関連して一言ふれておけば、aは題簽（外題）剝離のため、内題による。bは貼題簽（外題）をもつて示したもので、内題では「南蛮口・阿蘭口・和名イロハ奇」（寄の誤りであろう）とあつて、開幕初期から散見する「□□」という語彙集の類である。cは外題・内題ともになく、本文冒頭に「八曜徑（以日本里程記之焉）」亦出ル自「ボエス」書中「也」とはじまり、「寛政十二庚申十一月下旬魯鈍齋謹誌」とあり、つぎの二丁表に「和解例言」と小見出しがみえるので、これを書名として採択したわけである。以下、本文

最終丁に、〈第一ノ板ノ箇百耳尼久数ノ窮理ノ又一名ノ太陽窮理、同図〉とみえる。これで判明するように、資料cは本木良永『星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記』の附説である〈和解例言〉の部分の転写本と推定できる。さらに、早稲田大学所蔵本の『星術本原太陽窮理了解新制天地二球用法記』（写本）の第七冊第八巻の〈和解例言〉と比較対照すると両者はほぼ一致することが判明した。直接に本木良永のものからの書写ではなく、本多利明こと魯鈍斎の転写本のさらなる写しと断定できるのである。書名として、図書館で〈和解例言〉と与えたのは正解である。

この三種の写本が野口約蔵の書写であることは確かであるが、どこで、誰のという点が大切であるが、これについてbにつぎの記述がみられる。約蔵の父、敬治の手による。

此書は約蔵一代之心配を以て写候間後代可為家藏書、本書は本田氏三郎右衛門殿方ニテ写録スル也／野口敬治

豊昌
七十余齡

右で約蔵が本田氏のところ——当然、その蘭学塾ということになる——で書写したことが確認できる。いうまでもなくbのみでなくa・cも同じ所で書写したことは三本すべて同じ手であることから推定できる。書写の事情を書きこんでいるのは、約蔵の父の手によるわけである。先にふれたが、本田氏は後に考証するところであるが、その点、父、敬治の手でかなり詳細に記録されているので、どのような人物か明確にすることができる。さらに本田氏と蘭学のことにもわけいつて考証してみることがある。

a・b・cいずれも、全面的に図書館で修補した改装本である。大きさは縦二五四ミリ・横一七三ミリである。各a・b・cともに父、敬治による書き入れがある。それは本写本成立の事情がしられ、きわめて有効である。小稿ではまず、aを中心に検討して本写本の意義を考えてみよう。

a 和蘭訳文家法（函架番号ホ10・二三八四）

表紙裏に、〈文イ十三年六月十四（文字一部破損、推読した）約蔵死去／野口約蔵遺書／文化十□丁巳二月表紙附／親敬治／七十

三歳〉とみえる。

本文墨付は十八丁、料紙は楮紙。最終二丁の裏——表には〈長須豊昌（印・寿）／野口敬治男野口約蔵〉とある——に、本資料

のいわれが、野口豹藏の父、敬治の筆とおぼしくつぎのように記されている。

此書写は兵藏書写也此原本は本田三郎右衛門殿は御公義御扶持之人にて蘭学大門三通達之人なり兵藏師此而和蘭之学を学書籍
写録を始タル所以病三十九歳之時死去文化十三子六月十四日夕時 親敬治翌巳二月表紙附者也／親敬治七十三歳

また、裏表紙裏にも、〈豹藏遺書^{文化十三子六月十四日死去}／文化十四巳二月表紙附／親敬治七十三歳附之とみえる。文化十四年は一八一七年にあたる。

本文を検討したのち、三本のすべてに通ずるので、野口豹藏（兵藏）について考えることとしたい。野口の名は豹藏の表記と兵藏の両方があるが、どちらかという豹藏が主であるが、これは珍名表記と思う。虎や熊が名にあるのはごくふつうながら、豹は管見これまでに二例のみ。いうまでもなく、a・b・cすべて野口豹藏の書き留めた蘭学資料で、父の敬治（豊昌）が亡き息子を愛惜して、大切なものとして後生大事に保持し、今日に伝えたものである。豹藏は三十九歳で、文化十三年に死去しているので、何歳のころから蘭学を学習しはじめたか明確にできないが、それを寛政年間と仮定すれば、蘭学が江戸で隆盛のころといえよう（後述参照）。

さて、a『和蘭訳文家法』の本文は、はじめの一丁分はおそらく書き損じたと思われる、次丁からはじまるとしてよさそうである（したがって、実質的には本文墨付十七丁となる）。以下、まず全体を翻刻して内容吟味とする。□は虫損、（ ）推定読み、*私註をそれぞれ示す。

和解例言

一 阿蘭陀人此書ヲ名テ *Handen by farren fcuale geuyt in die kochte d'welc niet afgecomen is een d'gelyk vrag van de Maasden en gelyke der yuente fienet de wagg yddan* トエナリ此語ノ和語ニ翻譯スハ星術本原太陽窮理了解新制大地ニ球用法記ト通スルナリ

一 和解ノ文中ニ天學語ト記スルハ刺德印語拂郎寧語厄戴寧亞語其外他國ノ語ナリ

一 和蘭語ト記スルハ和蘭人平日俗談通用ノ語ナリ

野口家藏書

和蘭譯文家法 本由三郎右衛門公義卿獲得人也

野口豹藏家藏

約分ニ文化十四年三月十四日 三十九歳歿云

親教治文化十四年三月末紙附成 大初之書

『和解例言』(左)と左同書込み(右)

南蠻口
阿蘭陀口
和名イロハ奇

イシテホウエ
イテフツテ
イッペレイセイ
イリヤウス
イレンヘレ
イヘリコレ
イヘリヘン

鴨ノ皮
イラ草
仙人草
白レン
車前草
し切草
ト真蛇

和蘭譯文家法

和蘭書ノ吾ニ杜ルヤ語脈旋轉ニ文意錯綜ス其義ヲ索ルニ或ハ泛濫或ハ簡微ニシテ允通曉シ難キ者アリ故ニ譯文ハ業ハ唯專言語ノ書ヲ修ルニ在ル而已

譯言ノ書ヲ「タオルデン」ト云フ「タ」ハ「タ」ト云フ「オル」ハ「オル」ト云フ「デン」ハ「デン」ト云フ「タ」ハ「タ」ト云フ「オル」ハ「オル」ト云フ「デン」ハ「デン」ト云フ

又「リテン」ハ「リテン」ト云フ「リ」ハ「リ」ト云フ「テン」ハ「テン」ト云フ「リ」ハ「リ」ト云フ「テン」ハ「テン」ト云フ

『和蘭訳文家法』冒頭(右)と『阿蘭陀和奇』冒頭(左)

和蘭訳文家法

和蘭書ノ吾ニ杜ルヤ語脉旋転シ文意錯綜ス乃其義ヲ索ルニ或ハ泛濫或ハ隱微ニシテ尤通曉シ難キ者アリ故ニ訳文ノ業ハ唯專言語ノ書ヲ修ルニ在ル而已

訳言ノ書ヲ（ウヲオルデン。ブウグ）ト云（ウヲオルデン）ハ言ヲ云ナ又「ラテンス」「フランス」（皆國ノ名ナリ）「バスクアルト」（名ナリ）「コンスト」（諸芸術ヲ云ナリ）此四種ノ言ハ和蘭ノ書中ニ間コレヲ用ルモノアリ亦各「ウヲオルデンブグ」ト有

リ俱ニコレヲ備テ参互通考シテ彼訓詁ノ的当ヲ探テ其正訳ヲ求ムベシ

語意ヲ考索スベキ書ハ「サメンスブラケン」ト云平常問答ヲ撰タル者アリ又「アペブウグ」ト云授幼字訓ノ小冊子アリ又「レットテルコンスト」ト云書字ノ小冊アリ又「セイッヘリンゲ」ト云算計ノ書アリ皆宜ク（是旧式ノ便ナラサルヲ以テ也其説コレヲ訳文略ニ記スナリ今コレヲ茲ニ抄シテ即チ訳文ニ一条ヲ其次ニ記ス）

新製訳文式

凡爲翻譯者先用線字謄写本文次每一言以漢字訳之（若発語助辞有難正訳則附○圈若訳字有可以隨義而転之則附半圈於正訳左辺再註義訳或直以義訳則附小圈於其右或義訳須并之則先附△三角於其傍而記并於別二處此亦宜設△三角）

（3オ）附甲乙等小字於訳字之下以指点其語路若意義交錯則須其末録切意

「レットテルコンスト」ノ題言上
○初行ト第三行トハ「ロメインスアベセ」及「ホオフトレットテル」ノ体ナリ第二行ハ「ネデルドイツ」ノ体ナリ

○今童蒙ノ爲ニ読法ヲ記ス
線字ヲ以テ△コレオ謄写スル者即左ノ如シ

zeer bekwaam om alle

zeer bekwaam Om alle

大 (宜 (適 応 令 諸
寅 子 得 癸 甲
益
卯

(ママ)
bersoonen in korten

(ママ)
Bersoonen in korten

子 〇 (短 不 〇
乙 久 〇
丑

tyd op de gemakkelykste

tyd op de gemakkelykste

(時 在 〇 易 簡
就 丙
戊

Wyze te leeren spellen

Wyze te leeren spellen

法 〇 学 用
了 習 字
壬 己

lezen en schryven

lezen en schryven

読 及 画
書 字
庚

「(4ウ)

「レツテルコンスト」ノ題言中〇初行「ロメイニス」第□巳下「ネデルドイツ」ナリ

「(4オ)

op regt onderwys

Op regt Onderwijs

正 訓
丙 丁

in de letteren

In de letteren

〇 〇 書
甲

konst

konst

学
乙

〇是此書ノ題名ナリ

言 訳

「インデ」ハ助辞ナリ下ノ言ヲ上ニ接スル

法 読

デ オッ プ レギ ト オンデルウエイ ス イン
レツテル コンスト」(3ウ)

〔読法〕

セエル バクワアム オム (ママ) オツレ ベルソオネン イン コルテン テイド オブ デ ゲマツケレイキ
ステ ウエイセ テ レエレン スパールレン レエセン エン シカレイヘン

〔訳書〕

△バクワアム 其事ニ適スルナリ其事ニ宜キナリ今学習ニコ
レヲ言フ則応ニ益ヲ得ベシト云フ義トスニシ

△ベルソオネン

人ノ別称或ハ士ト云者ニ
似タリ今義訳シテ子トス

* 原語 *Persoonneem* の誤綴。

△オブ

在ナリ処ノ意アリ今教法ニコ
レヲ言フ則就クノ義トスベシ

〔切意〕

諸子ヲシテ簡易ナル法ニ就テ用字読書及画〔5オ〕字ヲ学習セシム応ニ久シカラスシテ大ニ益ヲ得ベシ
レツテルコンストノ題言下○書体意「ロメインス」ヲ用ルナリ

(ママ) nen (ママ) niest van (ママ) allegem (ママ) eyne

den dienst van alle gemeijne

将○ (使 之 一切
甲己故 供用 戊

scholen en school meest (ママ) eren beknoptelyk

scholen en school Meeste (ママ) ren beknoptelyk

学校 及 学師 採要
丙 丁 庚

t' zamengesteld

door

t zamengesteld

door

輯録 以撰
辛 癸

(ママ) de hakvoord

B Hakvoord.

〔姓〕 〔名〕
壬

「 (6オ)

「 (5ウ)

〔^(マ)読〕
□法

ネン^(マ) ネインスト^(マ) ハン アッレ ゲメイネ スコオレン エン スコオル メエステレン ベコノプ

トレイキ テ サメンゲステルト ドオル ベ ハカホオルト

△ベ 本書B一字ヲ書スル者ハ其姓ノ首字ナリ彼邦ノ人多ク知ル所ノ者ナル故ニ一字ニテ何某ト数字ノ姓ノ如ク読ムナリ然トモ今其姓何ト云フコトヲ詳ニセズコレヲ読ムナリ

△テン 助字ナリ其義一例シ難シ但其語勢上下ニ分ケ「メニス^(マ)ステレン」ノ言ニ及フナリ今將故二字^(6ウ)訳シテコレ□置^(マ)ク

△ドオル 是以テスルノ義ナリ凡撰者ノ名ノ上ニ必スコレヲ置今義訳シテ撰トス

〔^(マ)切意〕 將ニ一切学校及学師ノ用ニ供セントス故ニ其要領ヲ採テコレヲ輯録ス性某^(マ)ベ字ヲ以テ行「ハカホオルト」

撰^(マ)
 * 右の〈ネン・ネインスト〉は〈デン・デインスト〉とあるべき語。

〈余白あり〉^(7オ)

「セイツヘリンゲ」題言上 ○書体ロメインスヲ用

de vernieuwe

De Vernieuwe

○ 再修^(マ)
戊

cyheling van

CyHering van

算学^(マ) 之^(マ)
巳

mester willem

Mr, Willem

先生^(マ) 姓^(マ)
丙 甲

bartiecons

^(ママ)
Bartiens

名^(マ)
乙

「^(7ウ)

〔読法〕

デ フルニイウ ウエ セイツヘリンゲ ハン メステル ウイツレム バルチコンス
△ Mr エム ハメステルト云識号ナリ

〔切意〕

ウィツレム バルトコンス先生ノ再修算学○題名ナリ

同中

○書体上ニ同シ (8オ)

waar uyt men meest

waar uyt Men meest

此 由 人
乙 丙 甲

alle de grond legulen

alle de grond Legulen

諸 本 則
庚 辛 壬

van de leeken

van de (ママ) Reeken

之 算計
己 丁

konst leeren kan

konst leeren kan

術 学 得
戌 習 子

「 (8ウ)

* (甲) 以外は訓読の符号が欠落、翻刻者により補入してみた。

〔読法〕

ワアル ウイト メン メエスト アツレ デ ゴロント レ (ママ) グユレン ハン デ レエケン コンスト
レエレン カン

〔切意〕

人コレニ由テ算計ノ諸術ノ本則ヲ学習シ得ル所ノ者ナリ

「セイツヘリング」ノ題言下

○初行「ネデルドイツ」二行「イクリアンス」三行ヨリ六行ニ至テ「ロメインス」

七行八行皆「ネデルドイツ」ト「ロメインス」ヲ交ヘ書ス (9オ)

原本此一行上ノ
六行ノ末ニ連テ
七行ナリ今誤テ
此処ニ記スヨロ
シク改寫スベシ

Verkoopster

verkoopster : MDCCXL

賣 千七百
酉 四十
午 年

〔訳言〕

△末ノ読法ハ訳言ニコレヲ説ク
△ラアトステ 末ヲ云ナリ今再修ノ書ヲ復改
正スルヲ以テ義訳シテ三トス
△ベイ 従ノ義トス 今此書ノ徒テ出
ル処ヲ云故ニ義訳發行トス
△セエヘンチイン 千七百四十年ヲ云今M等ノ字カクノ如ク読ム者ハ
是數計ノ識号ニ用レハナリ 詳ニ下ニ解クナリ

〔読法〕

ヘルステルト フルメルデルト エン フルベイテルト ドオル メ
ステル ヤンハン ダム デセ ラアトステドリユク ネエルスチク
ヲフルシーイン エン ハン ホウテン ゲソユイヘルト (抹消) テ
アムステルダム ベイ イサアカ ハンデル ピユツテ ブウグフルコ
オペル：セエヘン チイン ホンドルト ヘエルテキ (10オ)

(ママ)
nerstelt vermeerderd en

Herstelt vermeerderd en

重 広 及
撰 益 丁
丙 丁

(ママ)
verbeetert door mri jan van

(ママ)
verbeetert door Mri Jan van

改正 撰 先生 (姓)
戊 己 乙 甲

dam deze laatste druk neerstig

Dam deze laatste druk neerstig

名 此 △三 (末) 刻 細
庚 辛 壬 密
子

oversien en van fouten

oversien en van fouten

(悉監終 且 者 誤
(見定篇 己 字
丑 癸 卯

gesuyvert' amsterdam by

gesuyvert' Amsterdam by

改正 (清〇 都和 △從
辰 (之 名蘭 發行

ysaak van der putte boek

Isaak van der putte, Boek

姓 名 書
戊 甲

「
(9ウ)

(ママ)
ben 15 augustus
den 15. Augustus
des yaars 1785
des Jaars 1785

訳語類

〔切意〕 ヤンハンダム先生コレヲ重広益正シテ改メ撰ム」(10ウ)

此三刻ハ終篇細密ニコレヲ監定シ且誤字ヲ改正スル者ナリ

于時紀元千七百四十年アムステルダム書賣イサアカハンデルプユッテ發行

右ノ千七百四十年ハ今歲天明乙巳ヨリ四十六年前ニ当ルナリ彼方ノ俗年号ヲ立ルコトナク
中古ノ積年ヲ以テコレヲ行フ

附云凡年月ヲ称スルニ日ヲ先ニシ月ヲ次ニシ年ヲ末トス俟令今年千七百八十五年」(11オ) 八月十五日ヲ云テ

「デン」「ヘイフ」「チイン」「デン」「アウグユストス」「ヤアルス」「セヘン」「チインホンドルド」「ヘイフ」「エン

「タヘンテキ」ト云ベシコレヲ記スル者即左ノゴトシ

△デンハ發語辭ナリ次15ハ數計字即十五ナリヘイフチインデント読ナリデスヤアルスハ今年ナ
リ又コレヲ略シテ記サル者アリ又 An: 「ア」ト「エナ」ト二字又 A: アノ一字ヲ書スモアリ是
レハ「ラテンス」ニ言略ナリ即 Anno 「アンノ」ヲ下略シタルナリ又 Ao ao トモ書ノ是中略也」

* (十二オ) は空白

(11ウ)

yk zal met eenige

Jk zal met Eenige

letters om u te

Letters om u te

laaten weeten

laaten weeten

yk verstaai iets

Jk verstaai iets

maar ik kan niet

maar ik kan niet

spreeken

spreeken

sprukt gy hollan

Sprukt gy Hollan

dsch taal

dsch Taal ?

△「イキ」^吾「サル」^將「メト」^以「エエニゲ」^数「レッテルス」^{書記}「オム」^為「ユ」^你「テ」^以「ラアテン」^令「ウ
エエテン」^知

○吾將ニ数章ノ言語ヲ^{以ツテ}□□□你ヲシテコレヲ知シムベシ^(13ウ)

△「イキ」^吾「ルス」^少「スタア」^然「イイツ」^吾「マアル」^能「イキ」^能「カン」^不「ニイト」^不「スプレ
エケン」^{説講}

○吾僅ニ知レル言語アリ然レトモコレヲ説講スルコト能ハズ^(13オ)

△「スプレユキト」^説「ゲイ」^你「オランツ」^{和蘭}「タアル」^{方言}

○你和蘭ノ方言ヲ説敷^(ママ)

△語尾ニ在ル「?」此ノ如キノ点ハフ^(ラ)□アガテエケント号シテ問落ノ畢ニ記ス号シナリ^(12ウ)

yk been u dienaar

Jk ben ú dienaar

△「イキ」^吾「ベン」^乃「ユ」^你「ヂイナル」^臣
 ○吾乃你ノ臣僕ナリ
 △是上ノ答語也言フ
 心ハ吾不才ニシテ賢念ヲ慰スルニ足ル者ナシ□当ニ君ノ使令ス
 □事^ルニ從ベシト云恭敬ノ詞ナリ

hoe baart gyal
 Hoe daart gyal?

△「フウ」^{如何}「ハアルト」^度
 「ゲイ」^悉「アル」^悉
 ○你ノ□□□^(起居フ)悉ニセン如
 何
 ー
 (14ウ)

yk wensch u goeden

Jk wensch u goeden

dag myn heir

dag Mijn Heir^(ママ)

△「イキ」^吾「ウエンスク」^{既冀}「ユ」^你「グウデン」^{康福}「ダグ」^昼「メイシ」^吾「ヘエル」^君
 △「メイシヘエル」ハ常ニ急呼シテ「メイネエ(ル)」ト云「ミネエル」ト云如ク聞ユルナリ
 ○吾貴君ノ康福ノ日ニ見エテ嘗テ冀フ所ヲ慰ス
 △是平常相見テ言フ所ノ祝辞ナリ
 △ダクト云者昼日ナリ是必其時ヲ指^チ如朝ナレハ「モルゴン」ト云タベナレハ「アホンツ」夜ハ
 「ナクト」ト云ナリ(14オ)

't is mooy weer.

't is mooy weer

△「エツテ」^{発語}
「ウエエル」^{天気}
同上
「イス」^好
「モオイ」

○天気好

vaar al wel go□^(ママ) aank

Vaar al wel god dank

△「ハアル」^度「アル」^悉「ウエル」^体「ゴオド」^(ママ)「ダンキ」
○起居悉休^{ヨシ}は神祐ナリ
△ハアルトハ原ト舟行ヲ云也コレヲ仮テ度日度世ノ義ニ用ルナリ
△今起居トスル者ハ義訳也ダンキハ恩ナリ今祐トスル者亦義ヲ以
転スル也凡如此類多シ下皆是ニ倣ベシ

de zon is op

De zon is op

○日出タリ

△「デ」^{発語}
「ゾン」^日
「イス」^{助語}
「オッフ」^出

de maan begon te

De maan begon te

schijnen

Schijnen

○明^月□^漸明ナリ

△「デ」^{発語}
「マア^月ン」
「ベゴン」^明
「シケイネン」^{助語}

Wat weer is het

Wat weer is het

○天気如何
△「ワアト」^{如何}「ウエエル」^{天気}
「□^イス」^(イ)「エツテ」

「(15ウ)

「(15オ)

(ママ) hy is een gehoor

Hÿ is Een gehoor

zaam kind

zaam kind

△「ヘイ」^他「イス エエン」
「ゲホオルサアム」^{孝子}「キント」

○他是孝子

hy is een oprecht

Hÿ is Een oprecht

knegt

knegt

△「ヘイ」^他「イス エエン」
「オップレキテ」^{忠臣}「ケネキト」

○他是忠臣

men kan een man met

Men kan Een man met

zyn ommegang

(ママ) Zy ommegang

△「メン」^人「カン」^{識察}「エエン」
「マン」^男「メト」^以「セイン」
「オムメガンク」^{交友}

○人ヲ識察スルニ其交

ル友ヲ□^以テス

veel vraagen en wel

Veel Vraagen en wel

onthouden

onthouden

△是學生ノ業ヲ云フ常語ナリ

○多ク問フ与能ク識スト

「オントホウデン

「エン「ウエル

△「ヘエル「フラアゲン

Wit laben vind

Wit Raven vind

men zeden al zoo

men zelden al zoo

zedes men trouwen

zelden men trouwen

○白鳥ハ是ヲ求ルニ希也
人ノ親睦交誼ヲ
□ル亦此
ノ如シ

△「ウイット「ラヘン「ヒンド「メン「セルデン
「アル「ソオ「セルデン「メン「トロウウエン
△「オウデン「サル「エエレン「ヨング
「サル「メン「レエレン

't haastig spoed is

't haastig spoed is

zelden goed

zelden goed

△「エツテ「ハアスチク「スプウト「イス「セルデン
「グウト

○蚤ク成ハ善美鮮シ

ouden zal men eeren

Ouden zal men Eeren

jongen zal men lenen

Jongen zal men Leren

○老タルヲバ敬フベシ幼キヲハ教
ベシ

△「オウデン「サル「メン「レエレン
「サル「メン「レエレン
「エエレン「ヨング

「
(17オ)

「
(16ウ)

右を通読して日頃この種のものに接しているわたしはこれが前野蘭化のものの写しであると直感した。本文中に「千七百四十年ハ今歲天明乙巳ヨリ四十六年前」とある点が、その具体的証拠である。この写本の原本は天明五年（一七八五）に成立したもので、蘭化の原本を一見すると、同じ記述を示す箇所（△按ズルニ、此ノ年數（千七百四十年をさす）、今年天明乙巳ヨリ四十六年前ニ当ルナリ」とみえる。そこであらためて、本文の冒頭を吟味すると、はじめの數行（前書き的部分）はのぞくが、〔訳言ノ書ヲ「ウヲオルデン。ブウグ」ト云……〕からはじまる説明は蘭化の天明五年成立の『和蘭訳筈』の〔附録訳文家法〕のつぎの文言と照応する。

凡翻譯ノ業ハ專言語ノ書ヲ修ルニ在リ彼邦訳言ノ書ヲ「ウヲオルデンブツグ」ト云和蘭言ノ外ニ「ラテンズ」「フランス」「バステルド」〔〔雅言ノ〕〔名ナリ〕〕「コンスト」〔〔諸芸術ヲ〕〔云ナリ〕〕ノ四種ノ言アリテ和蘭書中ニ間コレヲ云フモノアリ……

嘗テ製スル所ノ訳文式ヲ其首ニ記シ以テ淺考ノ例ヲ議ラシム但俱ニ家法ト為スヘクシテ大方ノ用ニ供ル所以ニ非スト云

蘭化亭訳文式

凡翻譯ヲ為ス者宜先總字ヲ用テ原文ヲ謄寫スヘシ〔如其「ホオフト」ノ体ヲ以テスル者アル時ハ、コレヲ略書ス可ラズ。又句讀、点画ノ如キ、必ズコレヲ失誤スヘカラズ〕次ニ毎言下訳字ヲ記ス〔漢字国字宜ニ随フヘシ〕

如發言助語ノ辭、正訳シ難キ者ハ○圈ヲ附スベシ……末ニ切意ヲ録ス〔国語漢文事ノ宜ニ随テ用ウベシ〕／「レッテルコンスト」ノ題言上（以下略）

＊詳察は小著『〔江戸〕時代蘭語学の成立とその展開』〔第2章 前野蘭化と蘭語の学習・研究〕を参照のこと。

右のように、「蘭化亭訳文式」という蘭化発明の翻訳法を「新製訳文式」と改称し、漢文体の前書きをもつて紹介、以下順次具体例をあげているわけである。字句に多少の相違はあるものの、ほとんどそのまま、蘭化『和蘭訳筈』によっていることは明白である。むしろ野口の写本には、〔嘗テ童蒙ノ為ニ訳文ノ式ヲ製シテ訳文略ニ載タリ〕とあって、蘭化の『和蘭訳文略』の名のみえることも貴重である。これに關しては、拙著ですでに考察したところであるが、最近もつとも信頼できる写本が早稲田大学図書館の

有に帰し、展覽会に公開しこれも近く翻刻紹介したいと念じている（目下、刊行中の『洋学篇』の月報、へわせだと洋学Ⅳで報告しておいた。参照されたい）。

蘭化の〈蘭化亭訳文式〉（以下〈蘭化〉と略示）では一書体で和蘭語を記しているが、本写本は二種（活字体と筆記体）の書体で書いている点、また、〈eeten〉に〈字〉（〈蘭化〉）とあるのを、〈書〉とするなどやはり多少の異同をみるが、甲・乙・丙・丁と漢文訓読式に語順を示しているなどまったく同一である。つぎの〈レットテルコンスト〉ノ題言中でも同様の方式を示し、完全に〈蘭化〉の書写であることが判明する。翻訳にあたつては、原文を示したのち、〈読法（片仮字表記）・訳言・切意〉の三部分にわけて説明しているが、これも同形式・同文である。また、原著者、〈B Hakwood〉に関して、〈蘭化〉を忠実に受けついで、Bを姓——〈何其姓何ト云フコトヲ詳ニセズ〉——と誤解したままである。蘭化は最後までオランダ人などが姓名を記すのに、日本と同様の順とかく信じて疑わず訂正しなかったようであるが、それを本資料も忠実に受けついでいる。

「レットテルコンスト」につぐ〈セイッヘリンゲ〉ノ題言も、上・中・下とあげて右と同様に〈蘭化〉のものに拠っているが、今、〈切意〉の部分で、両者を上・中・下の訳文で比較するとつぎのように多少の異同をみる。

○上・

○蘭化…再修ウキルレム・バルシエンス先生ノ算学（是題号也）

○資料…ウィツレム バルトコンス先生ノ再修算学○題名ナリ

○中・

○蘭化…学者此ノ篇ニ由ツテ、算術ノ諸本則ヲ習熟シテ、コレヲ得ル者尤モ多シトス

○資料…人コレニ由テ算計ノ諸術ノ本則ヲ学習シ得ル所ノ者ナリ

* 〈蘭化〉の〈習熟シテ・尤モ多シトス〉などは原文にはなく、（よまがら）〈学者〉も原文は *men* であつて〈人〉と訳すほうがよい。

○下・

○蘭化…此ノ新刻ハ終篇細密ニ校定シ且誤字ヲ改正スル者ナリ 于時紀元千七百四十年、アムステルダムノ書買 イサアカハ

ンデルビユツテ發行

○資料…ヤンハンダム先生コレヲ重広益正シテ改メ撰ムノ此三刻ハ終篇細密ニコレヲ監定シ且誤字ヲ改正スル者ナリノ于時紀

元千七百四十年アムステルダム書買イサアカハンデルビユツテ發行

*《蘭化》には改正した人物、^{ヤン}Jan van Daele が欠落してしまっている。ただし《監定》より《改正》(overzien)のほうがよさ
そうで《改訂》の意である。また《改メ撰ム》(verbeeten)も内容的には《校正》の方が妥当する。厳密に言えば、verstellen も《重撰》ではなく《改正》で、ここは《改正増訂版》を意味する。また、〈laatste druk〉に《三刻》の訳をあてているが、《蘭化》のように、《新刻》(最近版)が忠実な訳である。もつともこれについては、《資料》は《訳言》で、《末ヲ云ナリ今再修ノ書ヲ復改正スルヲ以テ義訳シテ三トス》とコメントしている(末は誤解で最新の意である)。
以上のように、《資料》はそれなりに多少の変更をみるが、《蘭化》をテキストとして全面的にこれに拠っていることは明白である。なお、《附云》とあるのは、《蘭化》とは別にこの本田ノ塾での教導によると思われる。

さて以上、書物のタイトルによって訳文の方法を教示しているわけであるが、これが終わると、《訳語類》として、短文をあげている。これも蘭化の『和蘭訳筈』にある《訳語類》と関係する。蘭化は二五種の短文例であるが、《資料》は十四種とすくない。そして、両者を比較すると、当然ながら一致するのである。たとえば四番目の《イキ・ウェンスク・ユ・グウデン・ダグ・メイン・〈エル〉(Ik wensch u goeden dag Mijn Heir. = 吾貴君ノ康福ノ日ニ見エテ嘗テ冀フ所ヲ慰ス)》は、蘭化の《Ik wensch u goeden dag, mijn Heer. = 吾、貴名ノ佳勝ノ日ニ見テ素懷ヲ慰ス》と同じで、蘭化が《按ズルニ》とコメントしているところも、《本写本》の《△△》とは同じである。

六、七番も蘭化のそれと同じ短文例であるが書写がわるい。《ハアルト》は vaart、《ハアル》は vaar である。本資料で、《△ハア

ルトハ原ト舟行ヲ云也コレヲ仮テ度日度世ノ義ニ用ルナリ △今起居トスル者ハ義訳也ダンキハ恩ナリ今祐トスル者亦義ヲ以テ転スル也凡如此類多シ下皆是ニ倣ベシ」とあるがこのコメントは、蘭化にはない。すなわち、〈蘭化〉のコメントとして、〈按スルニ、「フハアルト」ハ原、舟行ヲ云フナリ。コレヲ仮リテ度日、度世ノ義ニモ用ユルナリ 今義訳シテ起居トナスベシ。凡ツカクノ如キ類多シ。下皆宜シクコレヲ推シテ知ルベシ〉(右の——線部分はないことになる)とある点とほぼ一致する。やはり蘭化の教えなのである。後者より前者でコメントすべきところで、〈蘭化〉のほうが妥当する。〈蘭化〉は原文も〈Hoe vaart gy al? Vaar al wel, god dank〉と正しい。現代でも〈Hoe vaart u? How are you?〉を用いるが vaart, vaar は原形 varen ㄹ sail や navigate の意で、コメントどおりである。

さらに蘭化の〈訳言類〉にみえる例文と同じく、〈Ouden zal men Eeren Jongen zal men Leren. ○老タルヲバ敬フベシ幼キヲハ教ベシ / Wit Raven vind men zelden al zoo zelden men vrouwen. ○白鳥ハ是ヲ求ルニ希也 人ノ親睦交誼ヲ□ル亦此ノ如シ〉のアホリズムがある。これは、大槻玄沢『蘭学階梯下』〈成語〉にもみえるところである。同書に、〈常話並ニ警戒・成語凡テ八章蘭化先生ノ著セル蘭訳箋ニ載ル所ヲ増減シ語毎ニ訳字ヲ下シ訓釈ヲ加ヘ並ニ訳文ヲ作ツテ其例ヲ示スコト左ノ如シ〉とあるつぎの二文とも一致する。

オウデン	サルメン	エーレン	ヨングエン	サルメン	レーレン	ウイット	ラーヘン	ヒント	人	セルデン
Ouden	zal men	eeren	jongen	zal men	leren.	Wit	raven	vind men	zelden,	
老	可	人	敬	少	可	白	鳥	覓	人	鮮
アル	ソー	セルデン	メン	トロウメン	(もじ)					
此	如	鮮	人	睦						

原文の綴りは『蘭学階梯』が正しい。白い鳥はまれなことが白鳥では困るわけで、総じて〈資料〉は誤綴があつて、写し手の力量が推測される。RとL、VとBなどの誤綴を考えると、あるいは耳からきいてノートしたとも推測できる。

右のように、蘭化の〈訳言類〉Ⅱ玄沢の『蘭学階梯』Ⅱ〈資料〉と三者が一致するわけである。玄沢がのべるように、蘭化のも

のは玄沢に色濃く流れていることが、〈資料〉の例文によつても間接的に実証される（なお、玄沢が『蘭訳箋』とのべているのは、現存のものではない。多分現存の『和蘭訳箋』かそれに近いものをさすのであらう）。

以上、もはや詳述は必要なきに近い。まさに野口豹蔵は前野蘭化に教導を受けた本田三郎右衛門の門弟として、いわば蘭化の孫弟子にあたるわけである。さらに興味あるのは、どこにも何も示していないが、本田三郎右衛門が蘭化の学習テキストにより門弟を教えたこと、彼も同時代の大概玄沢（二七五七―一八二七）などと同様に、蘭化の門弟であることを裏付けることになるのである。

ここで野口の師事した本田三郎右衛門を一考しておこう。はじめに引用したところに、〈御公義御扶持之人にて蘭学大門二通達之人〉とあるように、蘭学にはかなり通じている学者であらうが、またCの資料、『和解例言』の末尾（38ウ・39オ）に、つぎのようにみえる。

本田三郎右衛門殿は公義之御扶持参人也エゾ其外之嶋々え渡りし人なり此人蘭学通達之人也而江都二隅居在而門人五百人有之由聞之

右は野口の父の筆である。もちろん、Cにみえる〈魯鈍斎〉は本田であることも確かであるから、この本田三郎右衛門は一般には本多利明（寛保三年・一七四三―文政三年・一八二〇）でしられる人物である。宝暦七年生まれの大概玄沢より十数年の年輩であつて、前野蘭化に師事したことも十分考えられる。つぎに〈エゾ其外之嶋々え渡りし人〉とある点、享和元年（一八〇一）に蝦夷にわたったことがしられているからこれなどをさすのであらう。文化五年（一八〇八）、幕府から野作地案内役に召されたという〈御公義御扶持〉もこうした点をさすと思われる。号の北夷もこのエゾ探訪と関係あると思われる。ちなみにシーボルトにアイヌ語やアイヌの情報を教示した最上徳内は利明の門人の一人である。

生地は越後国蒲原郡で、十八歳のとき出府し、算学を今井兼廷（庭）に、天文、曆学を千葉歳胤に学び、明和三年（一七六六）、二十四歳のとき、音羽に塾を開いた。音羽先生の異名がある。これまで前野蘭化に師事したことはしられていない。しかし『和解

例言』の写本を野口が書写している点からも判明するように、蘭学に関心をもち、蘭学をおさめたことはほぼまちがいない。司馬江漢——本木良永からきいたことを基に、江戸で『地転ノ説（地動説）』を唱えた——の著書に訂正の筆を入れており、両者は交友関係をもったようである。『蘭学階梯上』に蘭化に師事したものととして数名をあげる中に……：槐園（宇田川）、江漢ノ諸子及ヒ余茂質力輩其門ニ從游シ其読書訳文ノ法ヲ習得テ（十丁）とあるから、江漢とともに蘭化の門に遊学したと推量できる。そうでなければ、江漢などからテキストを入手したかもしれない。しかし当時の学問の授受の性格上、そうしたことは考えられず、やはり直接蘭化に接したと考えるべきであろう。独学では蘭学通達の士にはなれまい。例の「蘭学花相撲取合興行」という見立番付にはその名はみえない（江漢は西前頭六枚目）。おそらく、本田は蘭書の翻訳よりも天文学やさらに各地の旅行——天明の飢饉には奥羽の各地を探訪——という行動派であつて江戸での医師を中心とする蘭学者とは別の存在ではなかったかと思う。そして今回の新資料で本田が蘭学に通じ、門弟も多く、実際に蘭化の著書を学習のテキストとして使用していたことが判明したのである。したがって、まさしく江戸の蘭学を推進した人物として評価を与えねばならない。従来、狭い江戸蘭学界の地図は修正を要するのである。その貴重な資料が今回紹介する野口豹蔵旧蔵の資料ということになろう。

（すぎもと つとむ 文学部教授）